

『 向 春 便 り 』

後志教育研修センター
所長 長谷川 誠



調査研究事業報告会の成果

暦の上では春となりました。1月10日(金)に「令和6年度調査研究事業報告会」を倶知安町文化福祉センター公民館中ホールにて開催しました。ご来賓として、後志教育局の新居局長、後志町村教育委員会協議会の細田会長、後志教育研修センター組合の渡邊教育長にお越し頂きました。後援名義の教育研究団体代表の方々にもご臨席いただき、熱い視線に所員は少し緊張した面持ちで臨んでおりました。

調査研究の中間報告と位置づけされる本報告会は、当日参加も含めて管内19市町村から75名の参加を得ました。今年度も授業で最前線に立っている教諭の先生方がたくさん出席したことは喜びに堪えません。この2・3年の非常に嬉しい傾向であります。質疑応答の時間はたくさんの質問や意見等がだされ、会場での大きな熱量を感じ取ることができました。調査研究ばかりでなく、研修講座に対しても多くの要望が出されたことは大きな収穫でありました。また、センターが推奨している「板書型指導案」や授業改善に役立つ「指導案バンク」が学校に着実に浸透してきていることを実感しました。

私は昨年度に引き続き、社会教育に関する調査研究の報告と助言が勉強になりました。助言者である教育局の渡辺主査が学校教職員の参加が多いことを踏まえて、学校教育と社会教育の連携について具体的な資料を準備され、時間をかけて説明してくれました。地域と学校が「地域学校協働活動とコミュニティ・スクール」のビジョンを共有し、両者が互恵的な協力関係でもって地学協働を進めていくことの重要性を更に共通理解することができました。この場に参加した学校教職員にとって新たな学びとなり、どんどん管内に広がっていけば良いと感じました。



〈会場の熱い熱量〉

R7 講師陣に期待する

1月末に令和7年度研修講座に向けた講師団会議が行われました。講師陣の姿勢に大変手応えを感じた両日でした。この中で私は2つのお話しをしました。

一つは、『教学半』という孔子がまとめたとされる経書のうちの一つ『書経』に書かれていた言葉です。「教うるは学ぶの半ばなり」と読み、「人にものを教えるときは、自分自身が勉強してよく理解していなければ教えられない、つまり半分は自分にとっての勉強になる」、生涯を通して、学び続けることの大切さを教えています。

昨年度の講師団会議の中で私が心に残った言葉、「所長、自分は『まな板の鯉』になります」と、授業実践を申し出た先生がいたことを紹介しました。私は研修講座の挨拶の中で、自らの体験を交えて「教員10年目までは、一年に一度は授業を公開して、たくさんの人から批評や助言を受けて下さい。それがスキルアップの最も有効な手段です」とお話ししたことがありました。この先生はそのことを覚えていて、自らその役を買って出たのですね。まさに学び続ける教師を体現しています。

もう一つは、『子どもの心の扉は内側に鍵がある』、この言葉は北海道家庭学校の校長であった谷 昌恒先生が言われた言葉です。『教育力の原点～家庭学校と少年たち～』の著書の中に納められています。今年度の研修講座で私が心に残った言葉、「私は子ども達のために授業が上手になりたいので、先生方どんどん意見を下さい」と言って、授業に臨んだ先生がいたことを紹介しました。子どもを大切に、子どもを主人公にする気持ちが表れた、何と素敵なお言葉だと思いませんか。私たち教職員の仕事は、その出会いやその言葉がけの一つ一つが子ども達の未来に影響を及ぼすことがあるとするならば、一期一会でその瞬間、瞬間を大切にしていかなければならないと考えます。



〈講師団会議 1日目〉

今回の講師陣の真剣な眼差しを伺うと、来年度の研修講座もきっと成功すると思った2日間でした。講師を派遣して頂きました校長先生方に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

《R7.2.6》